

雨に踊れば 五十嵐彪太

傘が重い。と引つ張られる。

これが台風だった。強風のせいだと言えるのだが、今夜は小糠雨、音も立てずに細かい雨が降り続けている。

はほとんど重くなる。この間、新調したばかりの常盤色をした大きな傘だ。重さなど気にせず選んだのか、失敗だったか。

差しているのが面倒になって、ふっと腕の力を緩めると、（行ってもいい？）と声が聞こえた。「どこに行くんだ？」

（えっとね、念仏踊り）

念仏踊り、だど？

傘は上下に跳ねながらおれを引っぱって行く。

ええい、ままよ。どこへでも連れて行く。それにしても、ケニアの割に、子供っぽい傘だな、コイツ。新品だからか？

雨は相変わらずで、足音までも吸い取られたように静かだ。おれは、濡かれた傘に操られ、間拔けなステップを踏みながら細かい雨の中を進む。

たくさんの傘が、踊り狂っていた。

傘は、おれを振りほどいて、一目散に傘の踊りの輪へ入っていく。

踊る傘は実にさまざまだった。和傘も蝙蝠傘も、ビニール傘も、ぐちゃぐちゃに乱れて踊っている。けれど、ほとんどが壊れたり、年季の入った古い傘で、真新しい常盤色の傘は、ずいぶん少ない存在だ。それなのに、おれの傘は骨だけになった傘や、厳めしい蛇の目に促され、どんどん踊りの輪の中心へ入っていく。閉じたり開いたり、くるくる回って、傘が踊る。大勢の傘が、おれの傘に合わせて踊る。やがて、

◇骨傘

無言だった雨が念々を唱え始め、傘たちの踊りは一体となる。

おれは、傘たちの踊りに目を奪われていた。細かな雨が体中を濡らし、髪の毛から水滴が落ちるのも気にせず、立ち尽くしていた。

ようやくおれの手に戻ってきた傘は、興奮冷めやらぬ様子で、いろいろと話を始めた。

（あそこはね、昔昔、傘屋だったの。じいさんが、ひとりで傘を作っていたんだ）

（じいさんはすごく頑固でね。でも、じいさんの張った傘は、とても長持ちだったんだ）

（さつき踊っていた傘は、みんなじいさんの傘が、その生まれ変わりなの）

（でね、今夜はじいさんの祥月命日）

「なあ、おまえひとりだけチビだったろう？ 本当はまだお神にはなれない年なんじゃないのか？」
（うん、でもね。ついこの間までこんな所だった）

傘は「ばあ」と、あつかんべえをして見せた。蜘蛛やらゴキブリやら、鬼をぶら下げ、舌をだらりと

垂らした巨大なオンボロ傘が立ちはだかる。
腰を抜かしたおれは、からからと大声で笑うお化け傘に引き摺られて家に帰った。

